

<第 11 回ズーム三水会概要>

1979 年から 40 年以上継続している業際雑学研究会三水会の発起人であり、現在も主幹事を務めてくださっている前生協総研専務理事の岡本好廣さんの自伝を語られた画期的な三水会でした。

終戦時ソ連の進駐に出会った旧樺太現サハリンのご出身という稀有な出身で、戦後の日本人の生活の苦勞を 2 重 3 重に体験されながらも、大学生協から日本の生協を育て上げてこられた人生を語っていただきました。

司会の岩垂さんが締めくくりとして語られた通り、この時代の貴重な時代を生き抜いてこられた方々の自伝を語ることの意義深さを教えられた例会でした。

ある意味で、40 年の歴史を有する三水会に「自伝を語る」新しいジャンルが開かれたといってもいいかもしれません。詳細は次ページ以下の記録をご覧ください、

なお今回新入会者として中村範子さんが参加初めに紹介されました。「ロバート・オウエン協会」の事務局員として長らく務めて先月退職された方です。

第 11 回ズーム三水会報告

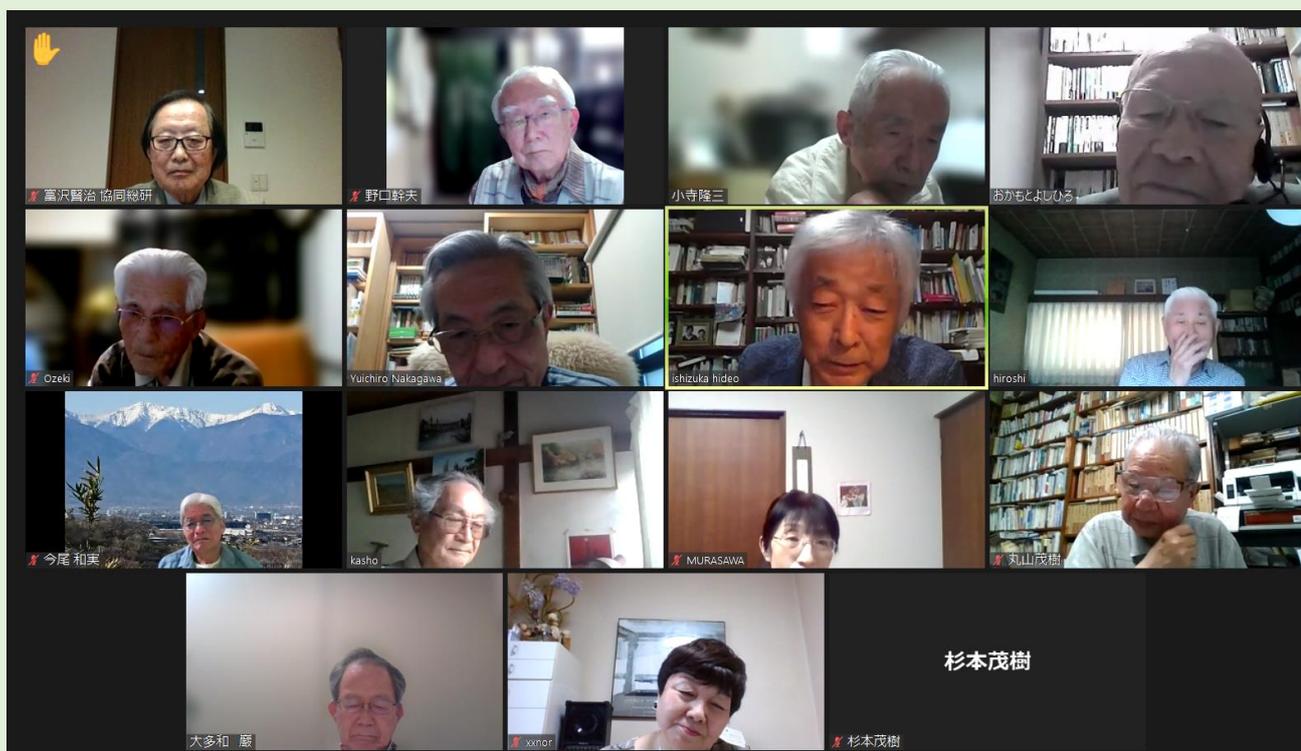
自分史を語る一樺太・サハリンでの生活から現在まで

2022 年 5 月 18 日 午後 4 時～6 時半

発表者 岡本好廣氏

司会 岩垂 弘氏

参加者 敬称略



第 1 列 富沢賢治 野口幹夫 小寺隆三 岡本好廣

第 2 列 小関栄 中川雄一郎 石塚秀雄 岩垂弘

第 3 列 今尾和美 斎藤嘉璋 村澤澄子 丸山茂樹

第 4 列 大多和巖 中村範子 杉本茂樹

<講演概要> 添付の講演資料参照

<録画> 一部エラーのため前半と後半の間の時間で録画されなかった部分があります。ご了承ください

前半：<https://youtu.be/XrJRfl1kJJM>

後半：<https://youtu.be/lzdF6JR5YFQ>

(三水会 5 月例会・2022 年 5 月 18 日)

『自分史を語る』—樺太・サハリンでの生活から現在まで—

岡本好廣

I. 樺太・サハリン時代

一面積は台湾とほぼ同じ、当時の人口は約 40 万人、現在の台湾は約 2,400 万人

- ・私は東海岸元泊郡知取町の生まれで父は王子製紙に務めていた。
- ・樺太で唯一の市は樺太庁があった豊原市だけで、他は町か村であった。
- ・樺太庁立豊原中学へ入り、寮生活をしていたが、終戦で知取町へ戻り、引き揚げるまでここを離れることは出来なかった。
- ・8 月 15 日終戦になったが、樺太ではそれ以後にソ連軍が国境を越えて押し寄せ、空襲と艦砲射撃を行い、日本海側から上陸して攻撃してきた。実際に戦争が終わったのは 8 月 22 日であった。当時から現在まで殆ど報道されていないが、沖縄に続き樺太でも本土決戦が行われ、死者の数は 5～6 千人に上ったと云われている。
- ・その原因は政府と軍の間の混乱である。当初政府は大本営の共通命令として 8 月 15 日、終戦の詔勅で日本軍全体へ停戦と武装解除を命じた。しかし翌 16 日札幌の第 5 方面軍は「樺太を死守せよ」との命令を下した。ソ連が対日戦争参戦の代償として連合軍側に千島、樺太の他、北海道の北半分を渡すよう要求していたので、北海道の割譲阻止のための手段だったとされる。 全国樺太連盟刊行 『樺太終戦史』による
- ・<日ソ不可侵条約>に頼り切っていた軍部は樺太にあった武器を対米戦線に移動させ、樺太は無防備に近い状態であった。こうした中でのソ連軍の侵攻で豊原市を始めとする町は混乱に陥った。私は豊原でソ連機の機銃操作に遭い、ソ連軍の進駐で危険に脅かされたが、どうにか生まれ故郷の知取へ戻った。
- ・日本人は今まで住んでいた町村へ戻され、スターリン統治下での抑留生活が始まった。その間にソ連軍による暴行や略奪もあった。
- ・帰国命令は突然やって来た。指示された後 3 日間で身の回りを整理し、指定された列車に乗って真岡へ向かわなければならない。帰国船に持ち込める荷物は大人で 3 個

だけ家財道具を含めて、その他は全て置いて行かなければならなかった。持参できる日本円も厳しく制限されていた。手荷物を整理する間に、外では次に入居するロシア人家族が待っていた。

- ・帰国はこれまで経験したことのない遠回りの航路であった。大泊から目視できる稚内までは4時間半であるが、汽車で真岡へ出て、青森、秋田、山形、新潟、富山、石川、福井の7県の遙か沖を通過して京都の舞鶴港まで4日掛かった。ソ連が大泊を軍港にして民間の船を通れなくし、以前から宗谷海峡に機雷を敷設していたためである。
- ・現地はソ連共産党による一党独裁政治のもとにおかれ、権威主義、独善主義、官僚主義のもとでの厳しい生活であった。スターリンの権力は絶対で、一切批判は許さず、日本人にとっては天皇による軍国主義政治がスターリンの専制政治に代わったのと同じであった。
- ・あれから70年余り、ソ連からロシアに衣替えした国に再びスターリンに似た強権的で独裁的な指導者が出て来て、歴史の歯車を逆回転させるとは想像しなかった。
- ・スターリンとプーチンの性格は類似したところが多い。権威主義、独善主義はもとより、国内では批判する者を弾圧し、他国への侵略を行い、国際的な批判に一切耳を傾けない。それが今回のウクライナ侵略に表れている。
- ・スターリンとプーチンは専制主義の指導者に見られる自己抑制できない性癖に加えてパラノイア（被害妄想、誇大妄想）の傾向がある。これによってスターリンは国内で罪のない人を数十万人も殺害した。プーチンは国内で批判する者を弾圧すると共に、ウクライナでは無辜の市民を殺傷し、国際世論の反対に全く耳を貸さない。
- ・悪夢のようなサハリン時代を思い出しながら、どうすれば現状を打開して平和を取り戻せるのか、憂慮しているのが現状である。

II. 飛驒（高山）時代

- ・父親は故郷の飛驒の山村から一人樺太へ渡った。45年前のことである。村では祖父が亡くなり、祖母が一人で田畑を耕して暮らしていた。父が毎年送金して田を買い増していたが、農地解放令で全部小作人へ渡っていた。父は僅かな田を耕す他に炭焼きを始めた。
- ・戦時中強制的に買わされた軍事債券はインフレのために大きく減価し、樺太に残してきた財産はもとより、多くの物を失った。

・私も田畑の耕作や炭焼きを手伝ったが、父の強い勧めで高山市の中学に編入し、自炊をしながらその後新制高校へ進んだ。

・中学・高校時代は苛めにも合わず、私は文芸部に所属して短編小説を書き、作詞募集に応じたり、自作のラジオドラマを放送したりした。

・困窮していたので修学旅行にも行かず、その間は村へ帰って農耕や炭焼きの手伝いをしていた。

Ⅲ. 東京（全国）時代

・高校2年になり翌年の進学をどうするかという問題が出てきた。最初の入学金と授業料さえ払って貰えれば後は自分でやっていけると考えた。樺太と飛騨の山奥での生活で苦勞が身についている。どのようなことにも耐えられると思った。父親も私を豊原中学へ進学させてからの願いは大学に入れることだったので進学を勧めた。東京に年齢の離れた母方の従弟が居るとのことで連絡をとってくれた。受験の際の宿泊は引き受けるとのことで、東京が近くなった。

◎大学入学と生協でのアルバイト紹介業務

・どこを受験するかということだが、誰にも相談しないで早稲田大学文学部に決めた。今から考えると世間知らずで無謀なようだが、文学に慣れ親しみ、ものを書くのが得意だからこれが一番いい道だと思った。一人でそれなりの受験勉強もした。

・こうして上京して受験したが、当時早大文学部は二次試験までであった。一次に合格して二次まで行ったので大丈夫だろうと思ったが、掲示板に番号がない。流石に呆然として、村へ帰って父の手伝いでもしながら分教場の代用教員にでもなろうかと真剣に考えた。ところがここで思わぬ幸運に恵まれて逆転で入学できた。

・住居は旧樺太庁の東京事務所を電話帳で調べて相談に行った。六本木に近い飯倉片町の一等地にあった。寮があつていろいろな大学の学生が入居して自炊しているというので入れて貰うことにした。奨学金は引揚者の子弟なので優先的に貸与された。

・こうして東京での学生生活がスタートした。この時以来自分には幸運が付いて回ると信じて何事にも積極的に行動し、概ねそのようになったのは幸いであった。文学の道は早々に諦めた。集まりに行ったところ既に名を成している学生もいて、原稿のレベル、量ともに違い、彼らと競争するのは無理と悟ったのである。

・学内で出来るアルバイトと思って、生協の学生委員に応募して幸運にも採用された。部署は勤労部でアルバイト紹介が仕事である。毎日電話で求人を受け付け、仕事の内容、勤務時間、時給、交通費支給の有無等の条件を確かめて掲示板に張り出し、時間が来るとマイクで1件ずつ紹介して希望者が多い場合は抽選にする。毎日数十件の求人申し込みがあり、食事等が付いて割のいい仕事は競争率が高く、応募する学生も真剣であった。学生の中には明日アルバイトに与かれなければ血を売らなければならないという者も居て、目が血走っていた。忙しく気を使う仕事だったが、生協の施設が文学部の地下にあつたので仕事の間に階段を駆け上って講義に出た。教授は受験勉強の参考書でおなじみの方や、著名な先生が多くて楽しかった。

・翌年生協の経営を担う理事に立候補した。当時は経営全般を学生理事が担い、賃上げを要求する年上の職員との団交にも臨んだ。経済状況が悪く、生協の経営も赤字が続いていた時代である。苦労が多かったが、やり甲斐もあった。

・その後全国大学生協連の役員になり、新しい大学生協の設立指導を行った。当時大学生協連の事務所は後の九段の日本武道館の場所にあり、神保町にあった日本生協連に顔を出して仕事を手伝っている内に職員に採用され、生涯を生協で過ごすことになった。

◎貴重だった日生協関西駐在の3年間

・機関誌の編集や研修会の企画、運営などを担当し、毎年夏に1週間の〈全国生協学校〉を開催した。使いで賀川豊彦会長のお宅へ伺い、その都度貴重な教えを戴いた。賀川会長が亡くなられ、戦前先生の指導で出来た灘神戸生協の田中俊介組合長が第二代会長になられた。

・その連絡係として関西駐在を命じられ、単身赴任した。関西駐在と云っても決まった仕事があるわけではないので、この機会に経営の勉強をしようと考えた。当時灘神戸生協は質量とも全国一の生協だったので学ぶには絶好の場であった。支部や店舗で学ばせて貰い、幹部会にも参加させて頂いた。夏休みには近く大学へ通ってマーケティング、マネジメントを学んだ。

・こうした努力が実って駐在3年目に中小企業庁の〈中小企業診断士試験〉の商業部門に合格し、登録した。担当範囲である関西、四国、九州の生協を訪問して知己を得たことも本部に帰ってから有益であった。こうして3年経って本部へ戻ること

になった。本部帰任に際して田中俊介組合長（日生協会長）と次家専務理事から「3年間よく勉強しよく働いた。褒美に灘神戸生協のアメリカ研修に加えてやる」という思いがけないお話があり、当時常務理事の竹本成徳さん（その後理事長、日生協会長併任）と一緒に3週間アメリカへ行って勉強した。この研修の5年後アメリカの生協の協力を得て1週間から10日間の「日生協アメリカ流通セミナー」を開催し、全国の生協役職員と共に現地で学ぶ機会を設け、その後長期に亘って継続した。

◎最終の仕事として選んだ研究分野

・私が最後に任命されたのは1991年に総会決定で設立された財団法人生協総合研究所の仕事である。東大名誉教授で経済学者の大内力先生が理事長で、その元で私が専務理事になった。これまでと異なる分野だが、元々関心があって望むところであった。

・日生協が10億円の基金を拠出し、会員生協と個人会員が会費を分担してくれたので当初から経営の心配は不要であり、後の法律改正で厚生労働省の公益財団法人第1号に指定された。

・生協総研の成功は大内力先生のお力によるところが大きく、先生のお陰で他の著名な学者、研究者のご協力を得ることができた。

こうして定年で退任するまで充実した年月を送れたのは大きな喜びである。

・「生協は人と人との繋がり成り立っている組織」と云われる。当然のように思われるが、振り返ってみると私自身多くの先達の教えを受けてここまで来られた。特に別添の資料に掲げた賀川豊彦先生、石黒武重先生、奥むめを先生、大内力先生のご指導が大きい。全国で未だ足を踏み入れない市がないのはその地の生協のお陰である。国際的にも南欧、中欧、北欧、米国、東南アジアと生協のある国々には言葉も碌に出ないのに数を重ねて行くことができた。

・この間日本の生協は組合員と事業高を飛躍的に伸ばし、連合体である日本生協連も大きな発展を遂げた。社会的活動も広がっている。学生アルバイトでこの道に入り、今日に至った者としてこれに過ぎる喜びはない。

・出身母体である大学生協がコロナのために学生が長期に大学へ来られなくなり、経営が苦しくなった。しかし職員は地域の生協の協力で仕事が継続でき、大学生協連には日生協が500億円の債務保証を行って支援することになった。将に生協ならではの連帯の成果である。この試練を耐え抜き、元の活動を取り戻すことを望んで止まない。